2019年『俳諧世説』現代語訳

次の文章は、闌更編『俳諧世説』の「嵐雪が妻、猫を愛する説」である。

嵐雪が妻、唐猫のかたちよきを愛して、美しき
嵐雪の妻は、唐猫で容姿が良い猫を可愛がり、美しい

ふとんをしかせ、食ひ物も常ならぬ器に入れて、
布団を敷かせ、食べ物も普通ではない上等な容器に入れて、

朝夕ひざもとをはなさざりけるに、
朝夕膝のそばを離さなかったので、

門人・友どちなどにもアうるさく思ふ人もあらんと、
「弟子や友人などにも、わずらわしく思う人もいるだろう」と思って、

嵐雪、折々は、「獣を愛するにも、イ程あるべき事
嵐雪は（妻に向かって）時々は、「動物を可愛がるにも、限度があるはずのことだ。

なり。人にもまさりたる敷き物・器、食ひ物とて
人間よりも良い敷物・器、食べ物（を与えること）も、

も、忌むべき日にも、猫には生ざかなを食はする
精進しないといけない日にも、猫には生魚を食べさせるなども、

など、よからぬ事」とつぶやきけれども、
良くないことだ」とつぶやいたけれども、

妻しのびてもこれを改めざりけり。
妻は（夫の愚痴に）我慢しても、これ（＝愛猫への態度）を改めなかった。

さてある日、妻の里へ行きけるに、留守の内、
さて、ある日、妻が里に行った時に、（自分が）留守にする間、

外へ出でざるやうに、かの猫をつなぎて、例の
外に出ていかないように、その猫を（綱で）つないで、いつもの

ふとんの上に寝させて、さかなど多く食はせて、
布団の上に寝させて、魚などとたくさん食べさせて、

東大合格 オンライン 敬天塾

くれぐれ綱ゆるさざるやうに頼みおきて出で行きぬ。
くれぐれも（猫の）綱を緩めないように　頼んでおいて、　出ていった。

嵐雪、かの猫をいづくへなりとも遣はし、妻をたばかりて猫を飼ふ事をやめんと思ひ、かねて約しおける所ありければ、遠き道を隔て、人して遣はしける。
嵐雪は　「あの猫を　どこへなりとも　追いやって、　妻を　騙して　猫を飼うことを　やめ（させ）よう」と思い、　予め　約束していた所があったので、　遠い道のりを隔てて、　人に命じて（猫を）　連れて行かせた。

妻、日暮れて帰り、まづ猫を尋ぬるに見えず。
妻が、　日が暮れて帰宅し、　真っ先に猫を捜すが　見当たらない。

「猫はいづくへ行き侍る」と尋ねければ、
「猫はどこへ行っていますか」　と尋ねると、

「されば、そこのあとを追ひけるにや、しきりに鳴き、綱を切るばかりに騒ぎ、毛も抜け、首もしまるほどなりけるゆゑ、あまり苦しからんと思ひ、綱をゆるしてさかなどあてけれども、食ひ物も食はで、ただうろうろと尋ぬるけしきにて、
（嵐雪は）「そう、（その件だが、）あなたの後を追ったのだろうか、　しきりに　鳴いて、　綱を切るほどに騒いで、　毛も抜けて、　首も　絞まるほどになったので、　『あまりにも苦しいだろう』と　思い、　綱をゆるめて　魚などもあげたけれども、　食べ物も食べないで、　ただうろうろと（あなたを）捜す様子で、

門口（かどぐち）・背戸口（せどぐち）・二階など行きつ戻りつしけるが、
玄関や裏口・二階などを　行ったり来たりしたが、
それより外へ出で待るにや、近隣を尋ぬれども
それから外へ出たのでしょうか、　近所を捜すけれども、
今に見えず」と言ふ。
今も見当たらない」と言う。
妻、泣き叫びて、ウ行くまじき方までも尋ねけれど
妻は、　泣き叫んで、　（猫が）行くはずがない場所までも捜し回ったけれども、
も、帰らずして、三日、四日過ぎければ、妻、袂（たもと）を
（猫は）戻ってこなくて、　三、四日過ぎたところ、　妻が　泣きながら
しぼりながら、
（俳句を詠んだ）
猫の妻いかなる君のうばひ行く　妻
猫の妻。　どんな方が、（私の愛猫を）奪っていったのか。　妻
かく言ひて、ここちあしくなり侍りければ、妻の友
このように言って、　気分がすぐれなくなりましたので、　妻の友人である
とする隣家の内室、これも猫を好きけるが、嵐雪が
隣家の奥さん、　この人も猫好きであったが、　嵐雪が
はかりて他所へ遣はしける事を聞き出だし、
企んで（猫を）よそに連れて行ったことを　聞き出して、
ひそかに妻に告げ、
こっそりと嵐雪の妻に告げ口し、
「無事にて居待るなり。必ず心を痛め給ふ事
「（あなたの愛猫は）無事でいるようです。　決して心を痛めなさらないでください。
なかれ。エ我が知らせしとなく、何町、何方へ
私が知らせたとは内緒で、　何町、何方へ
取り返しに遣はし給へ」と語りければ、
取り返しに使いを送りなさい」　と語ったところ、

妻、「かかる事のあるべきや。我が夫、猫を愛する事を憎み申されけるが、オさては我をはかりてのわざなるか」と、さまざま恨みいどみ合ひける。

妻は「このようなことがあるはずがあろうか。いや、（普通は）あるはずがない。私の夫は、（私が）猫を可愛がることに恨みがましく申しなさっていたが、それでは、私を騙しての行為なのか」と様々、恨みがましく論争した。

嵐雪もカあらはれたる上は是非なく、

嵐雪も嘘が明らかになった以上はどうしようもなく、

「実に汝（なんぢ）をはかりて遣はしたるなり。常々言ふごとく、キ余り他（た）に異なる愛し様（やう）なり。はなはだ悪しき事なり。重ねて我が言ふごとくなさずば、取り返すまじ」と、さまざま争ひけるに、隣家・門人などいろいろ言ひて、妻にわびさせて、嵐雪が心をやはらげ、猫も取り返し、何事なくなりけるに、

「確かに　あなたを騙して（猫を）連れて行かせたのだ。

常々言うように、

あまりにも普通の人とは違う（度が過ぎた）可愛がり方である。非常に悪いことだ。

取り返してはいけない」と、

繰り返し（今後も）、私が言うようにしないようならば、

様々言い争ったところ、

隣家や弟子などが　いろいろ言って（仲裁に入って）、

妻に謝らせて、

嵐雪の（怒りの）心を落ち着かせ、

猫も

取り返し、平穏になったところ、（嵐雪が詠んだ）

睦月（むつき）はじめの夫婦いさかひを人々（めのと）に笑はれて　嵐雪

喜ぶを見よや初ねの玉（たま）ばは木（き）

一月初めの夫婦喧嘩を人々に笑われて

（仲直りして私達夫婦が猫を見て）喜ぶのを見なさいよ。

初子の小さなほうきを（ねずみ相手のように）猫が（喜んで）じゃれているよ。　嵐雪